昭和39年5月30日発行

広報 にゅうぜん

No. 89

発行　富山県入善町役場
TEL入善局 301～305 番
編集発行責任者　本田清治
印刷所　入善町池原印刷所

町史編さん事業特集

町史編さんには私なりの熱情を

横浜市大・日本大学教授　文学博士　籠瀬良明（上野出身）

このほど、町史編さん委員になられました上野出身の籠瀬先生から米沢町長あてに、次の親書が参りました。ご存知のように籠瀬先生は、地理学の泰斗で、とくに地図学では日本的な権威者であり、数多くの研究論文を発表しておられます。このたびの町史編さん事業に対して、たいへんな賛意をいただきましたことは、わたくしたち住民にとって非常な朗報であります——

日夜長足の発展を遂げて、県下でもユニークな自治体となっております入善町が、その栄えある発展のあとを回顧されて、開かつな将来に処しようとなさることを、町史編纂委員会の発足の企てで存じ上げ、東都の空よりはるかに祝福申上げます。

入善町最近の飛躍は、町の先輩の残した輝かしい業績に加えて、現町長米沢甚吾先生の私慾を離れての御努力と、その統率のもとに活躍なさる幾多の長老俊足の郷土愛の発露と存じ深く敬意を表します。

私はすこぶる微力、非才の上に遠隔の地に職を奉じ、かつ研究学者としてのたそがれの年令に鞭打って、多少東奔西走の形で活動していますため、委員会のメンバーに名をつらねさせて頂いても、ほとんどなすところなく任期を終了する公算が大きいと愚考いたしますが、まぶたには、大蓮華の秀峯をバックにつらなる大入善町の景観がやきつき、波静かな、ときに怒りたける有磯海浜の情景が浮かび上がります以上、やはり委員に選ばれた光栄に対し、私なりの熱意で応えたいと存じます。

七月二十八日午後は、文部省講師として、富山市を会場に、全国各府県から一〇〇名選抜の高校地理教師に地図学を講義のため、富山市のその会場に参上致しますし、その前にも所用をつくり帰省できないこともありません。まだ余り予定も立ちませんが、御申出下さればその都度都合を申上げます。

編さん委員会のメンバーの大部分は、かねて尊敬する郷土史家や大先生揃いで、大変心強く存じ上げます。御指導のほど願上げます。

敬具

昭和三十九年三月二十一日

写真上は新設の編さん委員会室（公民館内—主宰・竹内、曳田）下は古黒部・清兵ェ島の磯場の松（栗虫清兵ェが磯けされたと伝えられる）を現地調査する奥田新作、野島二郎、竹内の委員

10日は交通事故をなくする日
20日は子供を事故から守る日
30日は交通環境をよくする日

◇お父さんお母さん／子どもたちを車の犠牲から救いましょう◇

町史編纂すすむ（1）

長島勝正

『「下新川郡史稿」のこと』

わが入善町でも大分前から町史編纂の計画がたてられ、今年になってからいよいよ修史の仕事が具象されつつあることはすでに御承知と思う。町の出身者のあらゆる広い分野にわたり、その総力をあげて最も新らしい方法と学問によつて、県内でも特色のある、そして他の市町村史と違つた入善町史を編むべく、その方法と資料集めに努力中である。

上野入膳境の田の真中にある「安住塚」
昔ある尼僧が死んだのでここに葬つた由

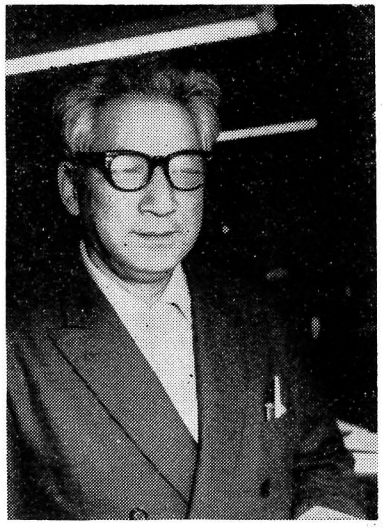
わが国の郷土史の事業には、いくつかの波がある。奈良時代の和銅年間という、今からざっと千二百何十年前の『古風土記（こふどき）』の貢文をはじめとして、江戸時代の中ごろから幕府の文化事業のあらわれとして、『新編武蔵国風土記考』や『新編相模国風土記考』が徳川幕府の直轄の仕事としてはじめられ、諸藩もこれにならって、その封内の歴史・地理のさまざまな郷土史の書物が出来たのである。これらは、いづれも立派なもので、今日でも学問的価値を失つていない。

当時わが町を支配していた加賀前田藩でも、『加登越三州志』や『三州地理志稿』のような郷土史が生れた。しかし、加賀百万石—日本一の大藩にしては、その書物の分量から見ても、あまり大きくなく、藩の大きさに比較するとあまり立派でないのがいかにも残念である。しかし、その内容は、今日でもこれによらねばならないものがある。

日露戦争ののち、わが国民が精神的自覚をえたころにも、全国に地方史、郷土史編纂の風が起った。わが富山県でも『越中史料』がつくられ、各郡市でもこれにならつて郡史や市史がぞくぞく生れた。

『下新川郡史稿』上下二巻が誕生したのもそのころである。

『下新川郡史稿』は、その編集者にわたしのおやじや肉親がいるので気がひけるが、当時としてはなかなかの名著で、学問の最先端を取り入れている。地理や地質や生物など環境の基盤から説き起す方法や、本文に於ても一つ一つ「古文書」の原本から引用して、それをもととして記述するなど、今日行なわれる地方史、郷土史の方法の先鞭をつけたものである。



ことに下新川郡史稿の尊いところは、中央の専門学者の手をわづらわさず、当時の郡内の人達の手だけでなしとげたことである。

だから発行当時から『下新川郡史稿』が立派な郷土史として中央学界からも高く評価されていたばかりでなく、勿論同じころに編まれた県内の各郡史や市史よりも数段すぐれていたものであった。

ただいまでは、東京の古本屋の相場でも一万円位はするそうであるのをみても、まだ『下新川郡史稿』の生命の終っていないことを証明するものである。

戦後県内各地でもきそって市町村史がつくられている。富山高岡両市をはじめ、県内各町村で、戦後十年前程から現在にかけて出版され、または編纂されているありさまで、これは戦後あらためてわが祖国、郷土を見直そうとする精神のあらわれとも見るべきもので、また文運隆昌のすがたかも知れない。

県内の呉西では、殆んど全市町村が、呉東でも旧新川地区でも半分以上がすすんでいる。これは、呉東がいわゆる〃文化果つるところ〃として遅れているばかりではない。この立派な『下新川郡史稿』が大きな壁となつて行く手をさえぎっているのに外ならない。

しかし、何分この書物ができてから半世記は残しているのだから、その後の学問の進歩と調子の合わぬところもあるし、また関係諸学問のうち地理学、民俗学や考古学、宗教学など綜合的に調べ上げねばならぬのが現代の歴史の学問であるから、これらの方法を取り入れて、入善町出身の諸賢と手を携え、日本的の名著である『下新川郡史稿』の恩恵を受けつつ、それを乗り越えて立派な新らしい『入善町史』を編むには、なみなみならぬ基礎調査と努力が必要であると思われる。

角力の世界では、師匠を負すことを〃御恩返し〃というそうである。学問の世界でも先輩や肉親の仕事にまさる業績をあげねばならない。

それは後輩であるわれわれのつとめである。幸い町当局でもこのことを理解されて十分に史料の調査や探訪に力を与えられるようだから安心して修史の業をすすめることが出来ると信じ先覚に負けぬ立派な町史を仕上げたいと思う。

〔写真は筆者・長島勝正委員〕

写真は二百年前椚山の十村役所当時の入善への往還道

★編さん委員の顔ぶれ★

会長　入善町長　米沢　甚吾
顧問　　米沢　元健
委員　竹内　常行　籠瀬　良明
長島　勝正　中村　奇雲
福沢　忠命　金沢　太一
米沢　政虎　柚木　春雄
奥田　新作　野島　二郎
竹内慎一郎　浦田　正男
寺崎　清作　広野　清秀
杉原礼次郎　本田　清治

担当部門別調査委員

前史、古代＝中村奇雲　**中世**＝竹内　慎一郎　**近世**＝野島　二郎　藤谷良華　**気象、地理**＝奥田新作　大田弘　吉島敬重　**農政史**＝野島二郎　寺崎清作　金沢太一　奥田新作　**商工、金融、経済史**＝柚木　春雄　米沢　政虎　**水産史**＝浦田　正男　曳田　利光　**用水史**＝竹内　常行　籠瀬　良明　竹内慎一郎　**教育、文化史**＝広野清秀　竹内弥三右ェ門　長島勝正　福沢　忠命　浦山義一　**民俗史**＝浦田正男　奥田新作　**災害、保安**＝中田憲政　**民生、衛生**＝米沢甚吾　**行政一般**＝杉原礼次郎　本田清治　**写真取材**＝曳田　利光　赤川秀夫　上田卓治　竹内　稔

調査委員会小委員会メンバー

広野　清秀　奥田　新作
野島　二郎　浦田　正男
竹内慎一郎　本田　清治

（事務部局）

課長・本田清治　係長・曳田利光　係員・赤川秀夫　上田卓治

祖先の生活文化を知る

―新しい道ができても古い道を忘れない―

温故知新……新しい道ができても、古い道を忘れない。この言葉の中には、絶えず将来への希望が呼吸しているはずです。

しかし私たちは、私たちの祖先がどんな生活をしてきたか、どうして今日の入善町が形成されたか宿命的な黒部川の水とどんな戦をしてきたか、どういう生活文化があってどんな先賢がいたか……

古い歴史のなかに新しさを見出し、これを新しい時代に具現することも肝要です。さいわい町では、こんど合併10周年を記念して、町史編さんを思いたち私たちの祖先が苦しみ生き抜いてきたすがたを、いろいろな文化を、できるだけ分り易く親しみのある本にまとめたいと考えられたことは、たいへん意義のあることです。

☆古老を囲む座談会の開催☆

この編さん事業は、広く住民の郷土愛に立脚した協力によってはじめて生きた親しみのある町史が生れます。それで、それぞれの部落の古老より古い文献や史跡の話を聞き、編さんの手がかりや史料にしたく、地区ごとの座談会が開催されました

3月4月には、春日、小摺戸上野　舟見、椚山、野中、青木芦崎が終り、6月は新屋、横山飯野、吉原、入善地区の予定。

（文中の写真は舟見の座談会）

私たちの住んでいる豊穣な土地には祖先の尊い血と汗がしみこんでいる。私たちはここに生を享けたことを深く感謝すると共に、どうしてこの郷土を一層栄えあらしめるかという郷土愛が息づく…

7月に商業調査を実施

商業統計調査は、統計法にもとずく国の指定統計で、昭和27年以降2年ごとに通産省で行っている基本調査の一つです。

調査には、本町において商業を営んでいる卸売、小売業（飲食店を含む）の全商店が対象となります。任命された11名の調査員が各商店を訪問しますから、格別のご協力をお願いします。

県営地籍調査の開業

田一枚ごとに新地番

現在の土地台帳は、土地の地籍としての役割りを十分果していないので、39年度から国土調査法にもとずいて県営地籍調査事業が実施されます。

第一段階として、小摺戸、新屋、舟見（山林を除く）、野中の4地区の調査を、明年中に完了する予定です。

手はじめに一筆ごとの地籍調査票の作成に取り組んでいますが、地図（限図）にしても、現在のものは実際と相違する点もあって、農地紛争を起したり、土地改良事業の阻因になることもありますので、土地の位置を正しく表示した地図および地籍簿が作成が進められています。

この地図の作成には、航空写真測量を実施して、田一枚ごとに新地番をつけ、コツソリ境界標石を動かしても不正が容易に発見できることになります。

☆建設課に地籍調査係を新設☆

次のスタッフで、4月から業務を開始（綜合事務所の2階）

係長・川原康久　西尾俊文技師
補　柳沢一郎　泉征幸　中島博之
上田順子　宝田洋子　竹内節子
岡島　みほ子　亀田　静代

電話の申込みは早急に

時代に即応して、町にも電報電話局建設の計画がなされ、このほど4月10日に起工式が終りました。工事は今秋11月中に完工の予定で、都市計画線の沿線に近代建築の偉容を誇ることでしょう。通信業務の開始は明年8月ごろになります。

電話の増設または新規加入を希望の方は、早めに入善局または新屋局に申込んで下さい。

なお、入善局と新屋局は合併の予定です。

――電話設置費用調べ――

（普通加入区域電話設置費）

- 公社債　8万円　（3万円）
- 工事債　1万円　（1万円）
- 加入料　300円　（300円）

注（　）内は2人共同の場合

（3人以上の共同設置は不可）

また報話局の設置で、普通加入区域が拡大されますが、特別加入区域は、普通区域からの距離により設置費が違ってきます

まちのなりたちのあらまし

入善町は、黒部川右岸の平野部と、黒部川河岸段丘（ハバという）上の台地部と、山間部から成り、台地部は古い時代の黒部平野の一部で、地殻の隆起により高くなったもの、段丘は隆ゆ起した旧平野を黒部川がけずりに取って出来たものである。舟見向山（狐平城趾）は棚山台地と共に最も古い黒部平野に属し、これらを含めて「黒部川扇状地」と名づけられている。

この扇状地に人が住むようになったのは数千年前からで、台地部の崖ふちに住居をかまえ、鳥獣魚貝を獲って生活した。そのころ段丘下の新平野部は全域が黒部川で、人の住める所でなかった。先住民族のあとへ大和民族が住むようになってから、北陸（高志の国、越の国）を通る人が次第に多くなり、川巾三里余りの黒部川が最大の難所として恐れられ「黒部四十八ケ瀬」と呼ばれた。

凡そ一二〇〇年ほど前に舟見野の山麓に「垂井」という小部落が出来たと伝えられている。しかし農耕可能の地域は舟川流域の小部分に限られ、台地の大部分は江戸時代中期まで水の引けない荒地で舟見野、雲雀野、善万野などと呼ばれた。舟見という名称は遠く日本海を通る舟が見えるという所からつけられたといい、往古は布名美　宇奈美とも書いた。また藤保内とも称した。舟見藤保内神社（八幡社）は当時藤保内組の総社であったという。

段丘下の平野部の開けたのは凡そ八〇〇年ほど前からと推測される。奈良の東大寺要録に「嘉応元年（七九四年前）八月、越中入善庄等、寺領役夫免除証文の事云々」の記事がある。入善という地名は仏語から出たらしい。

寿永二年（七八三年前）入善小太郎安家が現われ、木曽義仲の軍に従い功を著わした。文治四年（七七五年前）ごろ稲川将監昌満という浪士が当時の西蓮寺に入り昌満坊と称し、弟の元昌は郷士となって附近に館を構え、代々将監の名を継いだという。後に上杉氏の兵火にかかり西蓮寺の伽監堂塔、将監館、新屋の住吉社など焼き亡ぼされたと伝えられる。

入善庄は室町末期まで東大寺領庄園として存続した。文明一一年（四八四年前）に奈良で入善庄に関する紛争が起った。弘治元年（四〇八年前）入善弥太郎が魚津城の戦に馳せ参じた。永禄六年（四〇〇年前）に入善庄の篠河甚介が奈良の春日神社に石灯籠を一基寄進している。

戦国時代に東大寺の寺領という関係は消滅して入善郷となり松倉城の椎名氏に属し、またしばしば越後の上杉氏に侵略された。次いで天正七年（三八四年前）佐々成政領となり、同一五年（三七六年前）豊臣秀頼領、文禄四年（三六八年前）前田利家領となった。寛永一六年（三二四年前）加賀藩より富山藩、大聖寺藩分家の際、入善町地内は大聖寺藩領（八幡、入膳より青木　目川まで）富山藩領（黒部川下流右岸、上飯野東狐より下飯野、木ノ根まで）、前田利常養老領（小松城に隠居―その他の全地域）に分属したが、万治三年（三〇三年前）領地換えが行なわれ、全域加賀（金沢）藩領となり幕末に及んだ。

元和（三四八年前）のころより宿馬の制が定められ、入善と横山を相宿と定められた。寛文二年（三〇一年前）愛本橋がかけられ、翌三年に舟見宿が設けられてより舟見往来を上街道（又は夏往来）、入善往来を下街道（又は冬往来）と称した。明暦元年（三〇八年前）と二年に大津波があり、泊元屋敷より赤川、横山、八幡に至る道橋人家が破壊されたので、君島から泊に至る道が新設され、延宝七年（二八四年前）より入善だけが下街道の宿駅と定められた。なお宿駅には本陣、問屋場、伝馬等がおかれ入善宿は兵左ェ門次いで宗左衛門（竹内氏）舟見宿は野島氏次いで太郎左ェ門、長藏（脇坂氏）が本陣を勤めた。

明暦二年（三〇七年前）加賀小松在の今江から二〇戸（一七戸ともいう）が舟見野に入植し下今江、上今江を開いた。寛延二年（二一四年前）四千石用水が完成、享和二年（一六一年前）愛本新用水が完工し、舟見野台地に潅漑用水が引かれて漸次荒地は開墾され人家も追々増加した。維新前は舟見の領域極めて広く、愛本村の全部、及び野中村の大半を包含し、明日の法福寺も近年に至るまで舟見村明日山法福寺と称していた。

文化文政のころ（一四五年ほど前）に大阪の藤井長之助一行が入善に来り、操り人形を教えて以来人形芝居が盛んになり、明治二五年ごろまで毎年上演された。そのころより俳句、茶湯も盛んに行われた。同じころより副業として白木綿を織ることが盛んになり、新川木綿の名をもって知られ、糸魚川街道を経て信州松本方面へ移出された。なおこれに伴い夜業宿（よなべ）の幣風も生じた。明治一一年九月二九日明治天皇北陸巡幸の際、東町七区の道端で木綿機織の作業を実演してお目にかけたが、そのころをピークとして機械紡績の影響で衰微した。

写真は文化文政のころ盛んであつた操り人形（竹弥氏所蔵）

加賀藩の初期には入善町の地域は、入善郷（入善、椚山、横山の大部分）三位郷（サンミゴウ…上原、青木、小摺戸、新屋および野中の北部）大三位郷（オオサンミゴウ：飯野および柴垣新）五箇庄所属（古黒部、日吉新）藤保内（フジホナイ…舟見および野中の大部分）の5つの郷に所属していた。

加賀藩政の一大特色をなした十村（トムラ…大庄家、大名主に当る）制度が実施されてから十村の管轄区域を「組」と称し十村の居村人名を組名としたので、入善町の領域は「入善村兵左ェ門組」「泊町庄左ェ門組」「舟見村四郎次郎組」「舟見村友之助組」などと称したが、文政4年十村制度が一時廃止され「組」の名称は郷庄名を付して「入善組」「三位組」となった天保10年再び十村制度が復活して大三位組（入善、上原、青木飯野、小摺戸、新屋、椚山の中部、横山の西部）五箇庄組（野中、下山、椚山の北部、小杉新横山の東部、舟見の一部）三位組（舟見、愛場）の三組に所属し明治に至った。

明治4年廃藩置県により本町は新川県に所属、次いで明治9年石川県に属し、明治16年（80年前）石川県より分県して富山県となった。このとき本町の米沢紋三郎翁は分県運動の主唱者（分県請願委員長として請願文を起草）として活躍された。

明治22年3月町村制実施に際し町村合併が行なわれ、入善町舟見町、上原村、青木村、飯野村、小摺戸村、新屋村、野中村椚山村、横山村の2町8か村となった。このとき愛本村および野中村は舟見町から分離した。

昭和28年10月平野部に属する1町7か村が新設合併し、次いで34年1月、台地部に属する舟見町、野中分離地区が編入合併して現在に至った。（38年現在）

おくれてはならない国民年金の加入

不時の不幸にそなえましょう・・・・・・・・

国民年金も拠出制が始まつてから3年を経過しました。

いまでは、障害、母子年金の受給者は30名になり、また、いままでは死亡した場合、保険料は掛けすてであったものが、4月から、保険料を3年以上納めた場合、死亡一時金として給付されることになりました。

この制度も順調に軌道にのったためか、最近は資格の得喪や異動が増加してまいりました。

納めるものは立派に納めて年金を確保しましょう。

保険料を納めるのは、加入届をして国民年金手帳をもらってからでないとできませんから、先ず加入の届けを急ぎましょう

なお、次のとおり『国民年金の諸手続きと概況』をまとめて表示しましたから、該当の方は手続きの参考にしてください。

詳細については、住民課の国民年金係（役場窓口）へお問い合せください。

加入するとき・やめるとき

届出の書類	このようなときに
資格取得届	・20才になつて家業などに従事している人 ・会社、工場などの勤めをやめた人とその奥さん
資格取得申出書	・サラリーマンの奥さんで加入を希望された人 ・ほかから年金を受けている人とその奥さんで加入を希望された人
資格喪失届（喪失申出書）	・加入していた人が会社、工場などに再び勤めるようになつたとき
住所（氏名）変更届	・住所の変つた人は新しい住所地の市町村で届出をする ・氏名の変つた人
死亡届	・加入者がなくなつたときに家族の人が届出をする
手帳再交付申請書	・手帳をやぶいたり、なくしたりしたとき

保険料を納めるのが困難なとき

届出の書類	このようなときに
免除理由該当届	・障害年金や母子福祉年金を受けている人 ・国から生活扶助を貰つている人
免除理由消滅届	・上記のことに該当しなくなつた人
免除申請書	・障害者や寡婦の方で保険料の納めにくい人 ・家庭の事情などで保険料を納めるのが困難な人
保険料還付請求書	・会社、工場などに勤めた人で納める必要のない余分の保険料の納めた人

年金をもらえる人は

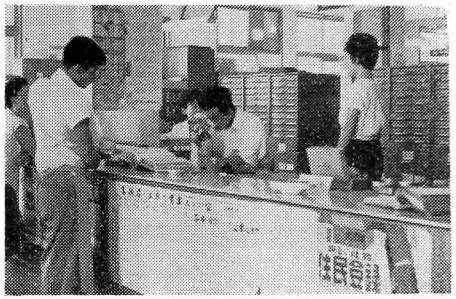
届出の書類	このようなときに
老令年金裁定請求書	・保険料を25年以上かけた人が65才に達したとき（希望により60才から受けられます） ・昭和5年4月1日以前に生まれた方は年令に応じて25年の期間を短縮 ・年金額は1年900円の割りで計算され20年をこえる分は1年1,200円で加算
障害年金裁定請求書	・ケガや病気によつて日常生活に支障が生じたときに支給 ・年金を受けられる人は（障害のおこる直前の1年間保険料を納めている人）、（障害におこる直前の3年間保険料を納めているか免除を受けている人）、（老令年金を受ける資格のある者）、上のいずれかに該当する人 ・年金額24千円、重度の障害の人は6千円加算
母子年金裁定請求書	・加入者である妻が夫と死別して18才未満の子を育てているとき支給 ・年金を受けられる要件は障害年金と同様 ・年金額は 母1人 子1人の場合は 19,200円 子が1人増すことに4,800円加算
準母子年金裁定請求書	・母親がいないため祖母や姉が孫、弟妹を育てていくとき受けられる ・要件と年金額は母子年金と同様
遺児年金裁定請求書	・18才未満の片親の子がその片親にも死に別れたときに支給 ・年金を受けられる子は死別の片親が障害年金と同様の要件を満たしていることが必要 ・年金額は子1人のときは12,000円 2人以上のときは2人目の子から4.800円加算
死亡一時金請求書	・3年以上保険料を納めた人が年金を貰うことなく死亡したときに支給 ・貰える遺族は配偶者、子、父母、孫、祖父母、兄弟姉妹の順 ・一時金の額は納めた期間に応じて最低5.000円～最高52,000円となつている
未支給年金支給請求書	・年金を貰つていた人が死亡した時生前に貰うべきであつた年金がある時は遺族に支給 ・遺族の範囲は死亡一時金と同様

☆☆調査員の氏名☆☆

入善＝野沢　良太郎　中野　文治　大角義盛　上田友吉　上田義信　上田秀雄　藤井敏和　米沢敬作　米沢孝之　板谷政英　岡田真司　福島栄松　米沢綾枝　谷口　稠　竹内豊次　田中孝治　柳原正雄　米沢武司　能島知行　北山博治　竹内善作　竹内秀夫　上田要一　田原まつゑ　田中豊松　五十里　文作　綿長松　上原栄清松　高　慶健次　長谷孝一　広田次郎三　**上原**＝森清信　高森正一　宝田　幸雄　宝田島造　愛場正男　本　多三郎　金田　岩男　吉島　吉雄　福島三吉　柳平弘　林源吾　曽　称義男　川端　義助　上島　仁四　上原勝一　浜西平吉　**青木**＝川　原徳之助　高沢義夫　泉　信雄　山崎芳雄　野沢勇太郎　松島研　二　松平才二　稲場昭博　木本　喜好　本田正　杉沢盛作　**飯野**＝名坂川数雄　大井長一　野坂　梅吉　長田　キミ子　川田　正一　岩田嘉顕　沼田暁美　伊野一郎　塚田善一郎　志摩勇吉　一島長　五郎　井田松雄　高浜慎　井田　祐俊　井田清秀　山崎由左ェ門　清田長吉　倉田作次　広田政次　滝本清吉　永原やい　島田　勲　竹田秀囧　上島由松　本田幸太　郎　飯田親敬　滝本政吉　**小摺戸**＝小林一巨　伊林弥久　大橋　恵一　細田健吉　秋元巌　若島　勝美　若島昇司　松井明　福沢　修一　松岡文雄　**新屋**＝白又清　谷田虎松　渡辺幸一　寺崎重松　米山誠一　鍋島啓次　水野博公　長谷孝郎　石垣勝朗　西島良雄　腰本秋雄　杉田政雄　渡辺松次　**椚山**＝藤塚幸雄　藤塚清松　吉　田清市　中島光明　野口昇　川　城彦三　長島友蔵　大田稔　坂　東良雄　青木清松　**横山**＝辻田　甚作　紺田与次　尾山賢二　佐　藤伝作　亀田年雄　亀田定次郎　荒木庄吉　米田隆吉　舟渡裕良　神子沢一晴　栗虫栄康　広川秀　雄　山崎要逸　**舟見**＝長谷清吉　山本一永　野島政博　小杉和子　高村捨次郎　野崎栄吉　三賀博　久　西島教子　小森政一　小森　勇峰　**野中**＝小坂一郎　梅津政　高　小林友吉　大蔵正夫　大割　愛義　稲村重利　田島隆司　百　石文太郎　（一五〇名）

住民サービスの向上をねらう

6月1日から総合世帯実態調査が始まります



（住民課窓口のカウンター）

県下にさきがけて、世帯の総合実態調査が行なわれます。

この調査は、町行政の事務処理を的確に能率化し、すこしでも住民へのサービスがよくなることをねらって、6月1日現在で各世帯を、次のようなことについて調査が実施されます。

1　住民登録　入善町に住むようになったことの調査
2　健康保険、国民年金の加入状況
3　恥業関係　世帯の特性
4　住居の状態
5　ごみおよびし尿などの処理状況
6　飲料水についての調査
7　生産者、消費者区分の調べ

以上のようなことが調査の対象となっております。

なお、6月1日から15日までに、それぞれの地区の調査員（氏名上記）が各家庭を調査のため訪問しますので、みなさんのご協力を切に願っております。

家庭文庫で明るい茶の間づくり

県図書館協会の新しいこころみとして、家庭に居ながら利用できる家庭文庫が設けられました。この文庫は、明るい家庭づくり、家庭の教養学習に役立てることをねらいとしています。

・・家庭文庫のきまり・・・

① 貸出し受ける団体は、婦人会およびグループ。同一グループ4名に対し1回1冊の割合。
② 貸出し期間は　1か月です
③ グループの代表者は、会員を4人ずつのグループに分けて名簿を作り、各グループの責任者をきめて、申込書を図書館へ提出します。
④ 代表者およびグループの責任者は、毎月定められた日に図書館に集って、本を選び、グループの数だけの本を借ります。
⑤ 責任者は回覧順序を決め、1人7日の期間で回読します。
⑥ 回覧の終った本は代表者がまとめて次の貸出日に返します

蔵書整理に大わらわな図書館員

◆新着図書案内◆

人間の声	高橋健二
ユーモアについての四十三章	新村　正
司会入門	三木鮎郎
本の中の世界	湯川秀樹
実存的自由の冒険	竹内芳郎
若き日の信仰	田中耕太郎
現代しんらん講座	大谷光紹
自己催眠術	河野良和
動乱の国の冒険旅行	兼松保一
エジプトの招き	末広恭雄
新人国記	朝日新聞社
お母さまこそ最良の家庭教師	宮下正美
子どもとつきあう法	品川不二郎
給料袋	矢加部勝美
「どん底」開店	増田小夜
人類滅亡戦	加藤地三
冷　戦	宮地健次郎
神々の誕生	貝塚茂樹
日本の右翼	奈古浦太郎
美と魅力	村上信彦
友情と恋愛	平井　潔
結婚と家庭	玉城　肇
職場と女性	嶋津千利世
女性の歴史	松島栄一
日本の外苑	永田　稠

5年で100万円のマネー・ビル
それは、自衛官になることです

5月31日まで受付
18～25才未満の男

毎月15日（土日祭日は翌日）

家族計画相談日です

母親（姙婦）教室の併設

・1人4回程度・姙婦赤ちゃんの衛生・赤ちゃんの躾け・赤ちゃんの育て方◇新家庭の家族計画指導も実施されていますから案内を受けた方は、必ず出席するようにしましょう。

母子健康センターの立看板